

黒田清輝君を訪ふ

一日我現代に於ける洋畫の泰斗として、將た新派の領袖として、名聲噴々たる黒田氏を平河町の居に訪ふ、其の「アトリエ」に延かれて對話數刻美術の天地に遊ぶ、抑も氏の談ずる所如何、

白馬會と伯耳義出品

白馬會ですか、左様去年で未だ二度目の展覽會ですが、お言葉の通りマー外に比べて一番入りのあつた方でしよう、今年是最う少し景色畫も大きなのを出すやうにしたいです、巴里に「ムルリトン」の「サークル」と稱して一つの畫家俱樂部がありますが、現代第一流の名家は争つて其會員たらんとして詰め掛ける、會員二人以上の紹介がなければ入會するを許さない、謂はゞ頭數の妄りに多からんよりは、精をすぐつて小さいながらに値のあるダイヤモンド的の俱樂部たらしめんとの精神でありますから、入會申込者が常にツカへて居て、今年申込んで直ぐ入會すると云ふ譯に往かないです、彼の「ブグロー」や私の師匠でありました「コラン」なども此會員ですが、丁度私共が白馬會をやつて居る様に銘々が自分の所有物として居るのですから、「サロン」に出して全國の畫家と技を闘はすもの、外は、皆な此「サークル」に掲げるのです、其故苦心の作もあれば卒筆畫もありて、名流平生の筆の色實に句やかに顯はれて居ます、會員が小勢ですから毎年展覽會の出品も百四五十點位のもですが、其れで繪畫界の大勢力となつて居ます、日本の白馬會も早く此ムルリトンのサークルの様に爲たいです、ソーなつたら夫こそ剛勢

なものです、中々一朝一夕の事には行きませんから、何んでも勉強して此結果を期しつゝ、進んで行く積りな
です、

アノ伯耳義の出品ですか、西洋では彼れが先づ普通の作です、牡丹の圖も婦人にしては上手な方でしやう、兎に角
西洋の畫家が我展覽會への出品は是れが嚆矢です、殊に現代の西洋畫家の作を見せるとは我洋畫界の進歩を助
くる處もありますし、旁た一週間位ツ切り展列しないのは甚だ惜むべき譯ですから、來年の展覽會にも掲出する
とに爲し、特に此作家は日本の展覽會に對する海外出品の先鞭者たるを忘るべきにあらざれば、紀念として我、
馬會の會員と爲すとに評議し、此般私から先方に書面を發して置きました、

裸體畫と當局者

イヤお言葉の通り裸體畫に就ては當局部内に少しは議論があるやうですが、困ツたものです、此議論は展覽會等
の出品は差支なきも、其外の印刷に附して發賣するとは禁止すべしと云ふのと、眞美の製作と卑穢なる觀念を
み居るものとは中々見分けが附くべき譯でないから、展覽會の出品市中の販賣物何んでも彼でも一切に禁止すべ
しと云ふのと此二種の論がある様です、第一のは既に展覽會の出品を許すからは印刷物にても猥褻でない者は之
を許すが好い、否らざれば展覽會に出品した畫の印刷物でも禁ずる譯になる、實に愚の話です、第二のは見分けが
附かないと云ふ情けない理窟ですが、其畫が猥褻だか然らざるかは之を見て直ぐに解る譯です、其れを見分が附
かないと稱して一切を禁ずるとは、海外も今や我美術の新製作に注目し、日本の内で世界的とか叫んで居る中
で、無學を披露し耻を曝すやうなものです、斯んな事を云ふ人が今日もあるかと思ふと實に落膽の限りです、

意匠と技術

世間には意匠を第一にして技術は二の次にしろと頻りに意匠を奨励し、其弊妙な理想畫を作るものあるに至れるか甚だ解らないとだと思ひます、兎に角畫は技術あつての畫です、是れが若し哲學か何んかであれば、理想一點張で宜いかも知れませんが、技術で以て作家の思ひ附いた或るものを顯はす繪畫ですから、決して技術は二の次で宜いといふ理窟がありません、四五年や五六年の修業で技術が固まる譯がない、此後唯の人達に無暗に理想第一、技術第二説を吹き込んで廻るからして、畢竟畫としては見られない、隨て圓滿に理想を顯はして居ない畫が出来るのです、既に一家を爲して居る腕前の人は成る程意匠を先にして畫を作つても左程可笑しな結果もなからんれば、此人自分で斯う思つて居る丈けは別段差支はないか、之を口にして後進に二とつのご規則の様にして示すのは後進を誤る甚だ悪い事だろうと思ひますがソレに理想畫は高尚を保つのが第一だから、其線も寫實と違つて單純にして往く、トコロが技術の側で形の研究が出来て居ないと、ほんとうの形なしに爲て仕舞ひます、形の研究が出来ての上で減筆を爲しつゝ單純の線にて書けばこそ、其形を保ちて而かも寫實を離れた高尚なものが出来るのです、ドダイ形を寫實的にも畫くとが出来ない内に、單純の線を使つて往くのだから誠に無理な話です、去ればと謂つて私は青年の畫家は理想畫をかいては可けない意匠は二の次にして可いと言ふのではありません、唯だ意匠も肝心だが技術も同時に研究を忘れてはならない、到底技術が成効して居なければ理想畫も意匠も役に立つものではないと云ふことを言つて置きたいのです、

白馬会第二回展の「伯耳義の出品」とは、ベルギーのウィッツマン夫妻の出品を指す。夫のロドルフ・ウィッツマン (Rodolphe Wytzman) 八六〇―一九一七年)、妻のジュリエット・ウィッツマン (Juliette Wytzman 八六六―一九二五年) は在ブリュッセルの名誉領事アレキサンダー・ハローを介して出品を希望し、ロドルフ二点、ジュリエット一点の計三点を出品、翌第三回展には兩人とも会員として出品している。ウィッツマン夫妻については、ブリヂストン美術館・京都国立近代美術館・石橋美術館『結成一〇〇年記念 白馬会 明治洋画の新風』展図録(平成八年一〇月)を参照。

また「理想画」について、明治三十二年二月九日付の新聞『日本』掲載の「美術紛々録」には次のような、本文献の一節と酷似した記事が見出せる。

「黒田清輝同記者に語つて曰く『世間には意匠を第一にして技術は二の次にしろと頻りに意匠を奨励し其弊は遂に妙な理想画を作るものがあるのは甚だ解らない兎に角画は技術あつての画です』と、現今流行せる日本美術界の弊害を論ず其言見る可き者多し」

黒田の「理想画」に対する慎重な姿勢は、明治二九年六月九日付の『毎日新聞』に寄せた「美術學校と西洋畫(下)」(本書二四、二五頁)中の「假令ば智識とか愛とか云ふ様な無形的の画題を捉へて充分の想像を筆端に走らする如きは無論高尚なことなれど二三年やツタ位の処では出来そうにもしない」というくだりにも見て取れる。とはいえ黒田が技術を備えた「理想画」の出現に期待をよせていたことは本文献からもうかがえ、「白馬會雜感」(本書二五二―二五六頁)にみられる青木繁の評価へ連なっていくものと思われる。黒田の「理想画」については、植野健造「思想表現としての絵画 黒田清輝作《智・感・情》」(『石橋美術館・ブリヂストン美術館館報』四二平成六年一〇月)、塩谷純「理想画」への道程 橋本雅邦《龍虎》以後」(『美術研究』三七七平成二五年二月)を参照。